

戦争に負けない「真の平和」を築こう

上 廣 哲 治

今年の夏はエルニーニョの影響で各地が亜熱帯並みの暑さになり、集中豪雨の回数も増えるとの予報がありました。厳しい暑さと豪雨——温暖化によって、夏はこれまでより過酷な季節になりました。

それでも子どもには長い休みがあり、花火大会や海水浴、夏祭りなどの行事が目白押し、ウキウキと心躍る季節に変わりはありません。大人にとっても家族で出かけたリ楽しい季節です。

しかし、忘れてはならないのは、広島と長崎の原爆の日、そして終戦記念日と、夏に集中するさまざまな戦争に関する行事です。先の戦争では、国の内外でおびただしい数の死者を出しました。わが国だけでも軍人・軍属、民間人を合わせると約三百十万人が亡くなり、世界中の犠牲者を加えればさらに痛ましい数になるでしょう。

戦時を生きた世代が少なくなるにつれて、戦争の記憶は徐々に薄れていきます。若い人の中には、日本が戦争をしていたことすら知らない人もいるそうです。「平和ボケ」という言葉がありますが、戦争のない世の中で暮らすうちに平和は当然のことになったのです。戦争は書籍や映画、新聞・テレビを通

して得る知識の一つになり、戦争の悲惨に対するリアルな感覚は失われています。

ところが、昨年二月二十四日、ロシア軍が突然、ウクライナに侵攻すると、それに抵抗するウクライナとの間で激しい戦争になりました。ウクライナを支持する側とロシアを支持する側、どちらも支持しない国もあり、世界は大まかに三つに分かれました。長期戦の様相を見せながら、いまだに戦いは収まる気配もありません。平和がいかに脆いものであるか、得難いものであるか、改めて気づかされました。

戦時下のウクライナ、ハルキウに住む俳句愛好家の女性、ウラジスラバ・シモノバさんの作品がネット^{*}で紹介されていました。「誰もいない部屋 カーペットの花模様は ガラスの破片の下」「子供たちは遊んでいる 紙飛行機を飛ばして 防空壕の中で」

戦争がなければ、花模様のカーペットの上でお茶を飲んだりおしゃべりをしたりと、平穏な日常があったはず。子どもたちは青空の下で紙飛行機を飛ばして遊んだでしょう。戦時下の日常を詠んだ句からは悲しみと静かな怒りが伝わってきます。ウクライナでは平和は当たり前のことではありません。

昨年の夏、ある年配の婦人会友さんが、「平和は簡単に壊されてしまう」と悲しそうな顔で嘆いた言葉が忘れられません。

「毎年この時期に、平和祈念朝起会に出席して広島原爆被害と過去のわが国の戦争に思いを馳せ、平和を願い祈って実践してきました。でも、ロシアのウクライナ侵攻で始まった戦争の推移を知ると、たった一人の政治指導者の独断で平和はいとも簡単に壊されてしまうんですね。むごい現実を見せつけられた思いがします。どれほど戦争を憎み、嫌悪し、忌避して、平和を願っても戦争は防げない。平和を祈ることや願うことに意味があるのでしょうか……」

*原文は英語で、日本語訳はウェブページ「京都×俳句プロジェクト」
(<https://kyoto.haiku819.jp/ja/20220524-1/>)による。

確かに平和を願い、祈るだけでは戦争を防ぐことはできません。ご婦人は平和が得難いものであり、その大切さを知るからこそ無力感にとらわれたのです。気持ちには痛いほど理解できます。それでも平和を願うこと祈ることには、戦争に負けない力があると答えなければならぬ。私はそんな思いを抱きました。無力だからといって、平和を願うことは無意味ではない。むしろ戦争が始まり、国と国とが争う今だからこそ、わが会が平和を祈り実践を重ねることに価値がある——そう答えて励ましたいのです。

五月に広島市で主要国首脳会議（G7サミット）が開かれました。政治的な意義についてはさまざまに評価があるようです。グローバル・サウスといわれるブラジルのルラ大統領は、「死者を出さないために今すぐ停戦すべきだ」と発言したそうです。確かにその通りです。しかし、一度始まった戦争を止めるのは、加速した暴走機関車を止められないように簡単なことではありません。そこにも戦争の残酷さがあります。今回のG7の意義の一つは、戦争で多くの人命が失われているさなかに原爆の被爆地である広島という場所で開かれたことだと思います。当初、テレビ画面を通して会議に参加する予定だったウクライナのゼレンスキー大統領はリスクを冒して来日し、次のように述べました。

「爆弾と砲撃で全焼しているウクライナの街が、広島平和記念資料館で見学した被爆後の広島風景ととても似ていた。数万人の家族が普通に生きていた街並みが、見渡す限り瓦礫がれきになった。広島は再建した。ロシアが瓦礫だらけにしたウクライナの街も早く再建できることを夢見ている」

この発言を知ったとき、私は初代会長を思い出しました。広島で被爆した初代が目にした広島市の光景は、おそらくゼレンスキー大統領が資料館で見た写真そのままだったでしょう。

初代も同じように復興を目指したのです。でもそれは家や学校、公園などを物理的に再建することだ

けではありませんでした。人々が仕合わせに暮らせる社会を築く。これこそが復興だと考えました。かなうことなら誰一人不幸と感ずることのない仕合わせな社会を築くことこそが、平和を維持し持続する力になる。そう考えたのです。しかし、今の日本は戦争に負けないほど強い平和の力を持っているのでしょうか。最低賃金に苦しむある女性は、「大切な誰かの幸せひとつ守れやしない私に、守りたい平和なんてない」と怒りを込めて発言します（『THIS IS JAPAN』ブレイクテイムかこ著）。

平和を守る強い意志は、人々の仕合わせから生まれるのではないのでしょうか。戦争のないことが平和なのではない。初代の目標とした平和は、「我も人も仕合わせ」であり、家族や夫婦・親子、友人などの人間を中心とした、「愛和」から出発するものだったのではないのでしょうか。

ウクライナで起きた戦争で私たちに問われているのは、「戦争のない平和」を求めるだけではなく、皆が仕合わせを感じることのできる愛和した「真の平和」を築くことではないのでしょうか。確かに「平和祈念朝起会」で平和を願い祈る行為だけでは戦争を防ぐことはできないでしょう。平和への努力そのものも、残念ながら武力に対してまったく無力です。いくら仕合わせに満ちた社会を築いても、砲弾によつて粉々に打ち砕こうとする国による暴力を防ぐことはできないかもしれません。

それでも私たちは戦争に屈せず、さまざまな人々と共生し愛和する実践を重ねるしかありません。敗戦の焦土しょうどから立ち上がった先人のように。それが、私たちにできる、戦争に抗う実践なのです。

危機感や無力感にうちのめされそうになったときには、わが会の原点に戻り、先輩が成し遂げてきた活動へ思いを馳せようではありませんか。目の前にある、具体的に取り組める倫理実践を積み重ねていくことはありませんか。それが先の会友さんへの私なりの答えです。